

1950年代日本における西洋稀観書の修復技術とその方針

東京大学経済学図書館所蔵「アダム・スミス文庫」を事例として

森脇 優紀

1 はじめに

本稿は、筆者を代表とする研究プロジェクト「日本の洋式製本の技術伝播に関する歴史的調査：洋装本資料保存のための基盤整備」（日本学術振興会科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究、課題番号：16K12543）において行った東京大学での調査結果をとりまとめて報告するものである。

日本では、明治維新以降、欧米の知識や技術習得を目的に、大量の洋書が輸入された。これに伴い西洋の製本技術も、大蔵省印刷局に雇われたW.F.パターソンによって導入され、水野欽次郎や徳屋敬忠、上原金次郎らが技術を伝授された。本研究チームでは、こうした日本の製本技術の沿革について、技術史および技術伝播の観点から、西洋の技術が日本特有の「洋式製本」技術としてアレンジされ、いかにして技術の伝播がなされたのか等を明らかにすることを目的としている。

この目的達成のためには、記録資料とモノ資料（現物資料）の双方からの実証的な研究手法を用いることが不可欠である。こうした研究手法に最適な対象資料として、当研究チームでは、東京大学経済学図書館および一橋大学社会科学古典資料センターの西洋稀観書群を選択した。

筆者の本務校である東京大学は、洋書が和漢書の購入数を上回っていた時代があったように、とりわけ洋書の蒐集に努めてきた¹⁾。このうち、経済学図書館所蔵の「アダム・スミス文庫」（以下、「スミス文庫」）は、関東大震災による被災や第二次世界大戦中の疎開によって劣化が進行し、1950年代に、製本技術者・服部政祐による修復が施さ

れている。

「スミス文庫」とは、アダム・スミス（Adam Smith, 1723-90）旧蔵書のうち約 300 冊からなるコレクションである。1920（大正 9）年に、当時ロンドン滞在中の新渡戸稲造が古書店（Dulau & Co.）のカタログで売りに出されているのを発見し、書店に赴いて購入（303 冊）、その後、経済学部創設の記念として寄贈されたことに始まる。このため同文庫の書籍は、古い西洋の装幀に、明治期の製本技術を受け継いだ最後の世代である服部の技術が合わさった形のものとなっており、モノ資料による調査対象として適切と言える。

また、同文庫は、書籍の修復前の状態や修復の作業手順、修復にかかる予算等の記録（以下「覚書」²⁾）や写真が残されており、記録資料の面でも本プロジェクトの研究対象としての要件を満たしている。

以上のことから、本稿では、モノ資料と修復に関する記録資料を基にして実施した「スミス文庫」の製本構造と修復痕の調査結果の概要を提示する。そしてその結果から、日本に導入された洋式製本の技術は、1950 年代当時どのように受け継がれていたのか、そして現在との共通点や相違点について分析する。また、「スミス文庫」修復の際に採られた「原型保持」が方針と実際の修復にどのように反映されたのかを検証しつつ、1950 年代の洋式製本の製本家や図書館界において理解され、実践された「原型保持」とはどのようなものであったかを考察する。

2 東京大学経済学部における「スミス文庫」 修復事業

1) 修復事業の背景

「スミス文庫」の修復事業は、1955（昭和 30）年 1 月 18 日に開始された。1920 年の新渡戸による寄贈以降、「スミス文庫」は幾度も危機に直面してきた。1923（大正 12）年の関東大震災では、学内の建物は延焼に見舞われたが、経済学部の職員や学生らによって、建物の窓から投出されたことで焼失を免れた。しかし火や水濡れ、投出による損傷が残った。第二次世界大戦中には、山梨県の甲府市図書館に疎開したことで、全て無事に残ったが、移動や疎開中の保存環境は決して適切ではなかった。こうした危機を乗り越えた一方で、「スミス文庫」は損傷・劣化を免れなかった。

さらに戦後の新学制における大学図書館の整備・改善の動きが同時期に起こっていたことも、この修復事業の背景にあったと考えられる。

文部省は、1952（昭和 27）年 7 月から「国立大学図書館改善研究会」を設置し、大学図書館の機能の整備・改善のための研究に着手した。その研究会の成果は、同年 11 月に「国立大学図書館改善要項」としてまとめられ、1953 年 1 月に各大学に通達された³⁾。また同年 2 月と秋には、この要項に基づいて国立大学図書館研究集会が、文部省主催で実施されている。本研究プロジェクトにおいて調査対象とした一橋大学附属図書館や東京大学経済学図書館の修復事業は、国立大学図書館改善の動きが本格化した直後の 1954～55 年に始められていることから、改善運動の一環として検討・実施された可能性が考えられる。

2) 修復事業の開始

① 修復者の選定

「スミス文庫」の修復事業に先だって、一橋大学では、1954（昭和 29）年 1 月から所蔵の「メンガー文庫」などの西洋稀観書の修復事業が実施された。修復者の選定にあたっては、東京大学附属

図書館内で製本業務を担当していた荒井製本所や、同附属図書館の運用課・図書館学資料室主任であった永峯光名から情報を得て、服部政祐に依頼している。このことから、東京大学経済学図書館の場合も、荒井製本所や永峯ら学内から情報を得て、服部政祐に修復の依頼をしたと考えられる。

服部政祐は、「旧上野図書館から宮中への献上本を、手作りで金パク、ハク押し総革製本で仕上げた、諸製本で長い経験を持つ」⁴⁾、「現在の日本に於ける製本師の中でも諸（もろ）の第一人者」⁵⁾と言われていたように、実績のある著名な製本家であったようである。

諸製本とは、現在では「注文により一冊々々を製本するもの」、「一般には手綴じ（手かがり）で製本する」⁶⁾と定義されている。また、この諸製本を行なう製本師を諸師（もろし）という。修復事業が行われる以前の 1939 年に出版された『書物語辞典』によると、諸師とは「本の修理や、一部製本をする者」で、「洋書師、講義録師、和本師等の専門」⁷⁾があったとされている。

② 修復前の状態

修復事業当時に記録された「覚書」によると、修復前の「スミス文庫」の状態とその資料数は次の通りであった。

- 1 表紙が両方取れている（含・取れかけ） 32 冊
- 2 表紙が片方取れている（含・取れかけ） 57 冊
- 3 表紙の両方を紛失 2 冊
- 4 表紙の片方を紛失 2 冊
- 5 背が破損 5 冊
- 6 背が中央から割れている 8 冊
- 7 背の脇がひび割れし、表紙が紐のみで繋がっている 片方のみ 62 冊 両方 41 冊
- 8 背革一部破損 21 冊
- 9 表紙の角破損 30 冊
- 10 背・表紙等の革が一部剥離 115 冊
- 11 背の脇がひび割れ 135 冊
- 12 背革にひび割れ 24 冊

- 13 表紙革の変色 6冊
- 14 本紙の一部汚損あるいは毀損 10冊
- 15 本紙の綴じ目が切れている 1冊
- 16 表紙の紙の擦り切れ 4冊
- 17 修理されているが「不体裁」のもの 3冊⁸⁾

また表装の革は、経年劣化や関東大震災の際に火にあぶられたり、資料救出の際に水を掛けられたり放り出されたこと、さらに第二次世界大戦中の保管環境などが原因で風化しており、強く持つと崩れ落ちる状態であったという。さらに、綴じ糸もかなり脆弱となり、表紙との連結が弱い状態であったようである。

なお劣化の状態は、1955年1月22日と29日に、当時附属図書館の経理掛長であった山下清作によって写真撮影されている。ただし現存するのは23枚で、それらは全資料の写真ではなく一部の資料の状態が撮影されたものである。当時は、全資料を撮影していたのか、または現存写真の通り一部資料のみを撮影したのかは定かではない。

③ 修復の方針：「原型保持」

修復に際しては、本事業に関わった大河内一男経済学部教授が、厳密な「原型保持」で実施することを服部に指示した。「覚書」では、修復の方針について、「現状そのまゝを保存する…爪の垢一つ失わないようにといふ修理方針」、「現存する元の材料を一かけらも粗略に扱わない」⁹⁾と言及している。

また同時期に稀観書の修復事業を行なった一橋大学附属図書館においても、「表紙裏の紙一枚も疎かにせず、旧態を損わないように、できるだけ、あるがままの姿に補修再現する」、「どうしても補修の利かない物は、当時の状態の製本に模して作り上げる」¹⁰⁾という「原型保持」に似た修復方針を採ったようである。これらが「原型保持」という当時の修復の考え方であったと推察される。

この「原型保持」は、おそらく現在にいう「原形保存」、つまり資料の原形・オリジナリティの

保持の意味に近い考え方であったと思われる。現在では、「修復の4原則」（原形保存の原則、安全性の原則、可逆性の原則、記録の原則）の第一に謳われている。1966年のフィレンツェの水害を契機に、1979年に国際図書館連盟（IFLA）は、修復を中心に置いた『資料保存の原則』を公表し、世界の図書館に普及していった。なかでも日本の紙資料保存の現場では、修復の4原則としてその思想が定着をみたとされる¹¹⁾。原則の定着の時期を考えると、大河内や一橋大学附属図書館では、図書館界で国際的に提唱される以前から、「原形保存」の考え方を認識していたことになる。

図書館界に先立って世界では、芸術作品やモニュメントといった文化遺産の保護・修復については、「原形保存」の考え方が提唱されていた。その起源は、イタリア政府の中央修復研究所を創設したチェーザレ・ブランディ（Cesare Brandi, 1906-88）の修復・保存の考え方に遡ることができる¹²⁾。ブランディは、1951年からユネスコ機関（ICOM）の文化遺産保存修復関係の任務に就いている。

文化財の保存・修復に関する憲章等の文書は、1950年代までに複数起草され、明文化されていた。特に1931年の「アテネ憲章」（Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments）では、「完全な修復は行わないこと」、「修復することが不可欠であると思われる場合においても、いかなる時代の様式も無視せずに、過去の歴史的・芸術的作品を尊重する」ことが推奨されている¹³⁾。また、その影響を受けて、1932年には「イタリア修復憲章」（Carta Italiana del Restauro）が交付されている。これらは、あくまでも芸術作品・歴史的モニュメントを対象とするもので、図書の修復に関する言及はないが、こうした考え方を大河内や一橋大学がすでに認識し、図書の修復にも有効であるとみて応用した可能性が考えられる。

④ 修復作業内容

服部が行った修復内容の概要は、「覚書」に記

録されており、要約すると以下のようになる。

1 旧表装を全部剥がす

この作業にあたっては、見返しの紙を外し、それから内側（見返し側）の革を剥がして、外側の革を外す。また、見返しには、和紙による裏打ちを施して補強する。

2 綴じ糸（麻糸）と背の修復

劣化して機能を果たしていない背の支持体には、新しい麻を足して背の形をつける。その際、元のように背革を背に直接貼り付けると旧装の革がひび割れを起こす可能性があるため、密着はさせずに浮かして背を形成する。その結果、元来の背バンドの形が背に浮き出しにくくなるため、背革の内側に和紙を貼って形をつける。

3 背と表紙の接続

背と表紙の接続に用いられている糸が劣化していることから、新しい麻糸を元の通りの形に入れる。さらに、背バンドと背バンドの間に和紙を蝶番式に貼って補強する。

4 新しい革で全体を覆う

5 旧革をその上に貼る

剥がした旧革は、ぬるま湯で柔らかく戻しておき、糊で貼り付ける。

6 見返しを糊で貼り付ける

7 ラノリン¹⁴⁾で手入れする

8 内部の破損個所の修理

紙の破損個所には、他の古書から似たような色の紙を借用、あるいは和紙で補う。色味が合わない場合には、植物を煮詰めた絵具を作って、紙に塗って色合いを似せる¹⁵⁾。

こうした処置は、全資料に施されたわけではなく、特に1～6の修復は、表紙全体の交換が必要な場合の処置といえる。修復全体における内容の詳細については、次章で言及する。

3 「スミス文庫」製本構造・修復内容調査

1) 調査期間・対象資料・調査方法

現物資料による製本構造調査については、2018年6月から9月と、2019年6月から10月にかけて、篠田飛鳥氏（現所属・一橋大学学術・図書部学術情報課古典資料係）の協力を得て実施した。

対象は、服部の修復以前に東京大学経済学図書館所蔵となった303冊（141タイトル、請求記号：アダムスミス:1:1～アダムスミス:141）である。

調査手順について、まず書庫に配架されている現物資料の製本構造調査および修復内容の調査（いずれも非破壊による調査）を実施した。ただし、綴じについては、背部分に隙間がほとんどないことから、綴じの支持体の状態や綴じ等への補強の有無、表紙との接続方法などの目視確認が困難な状態であった。そのため、綴じの項目については、判断可能な範囲で状態を記入し、判断がつかないものについては、「わからない」と記入することとした。目視による確実な結果が記入できた項目は、表紙の修復方法と花布^{はなぎれ}交換の有無である。調査結果については、本研究プロジェクトのオリジナルのカルテに記入した。カルテの詳細については後述する。

なお、資料の中には、服部の修復以降に外注で新たに修理したもの（現在修理中のものと修復済のもの）がある。それらについては、現物資料と併せて業者・製本家による報告書と画像データを基にカルテに記入した。カルテ記入後、カルテの内容と服部の修復前の写真とを対照させ、服部による修復内容を確認した。その後、カルテの情報から修復のパターンを分類し、特記事項（服部以外の修復の有無など）や修復前写真との対照結果などと併せてデータ入力し、「覚書」にある作業内容との比較した。

2) 調査カルテ：調査項目と評価基準

「スミス文庫」の調査に先立って、一橋大学では2017年8月から9月にかけて、所蔵の資料に

みられる製本構造および修復(1954~57年実施)痕調査を開始している。その際、本研究プロジェクトのメンバーで、一橋大学の調査を担当した床井啓太郎氏(当時・一橋大学社会科学古典資料センター助手、現所属・松山大学経済学部特任准教授)と調査の協力者である篠田氏が、調査カルテを作成した。「スミス文庫」の調査カルテは、このカルテを基に、篠田氏が調査を進める中で適宜修正を加えていったものである。カルテと評価基準のメモ書きがついたものを本稿末尾に掲載する。

カルテには、表紙、背、綴じ、見返し、ノド、本文紙(カルテでは「中身」)の6項目に分け、各項目について修復の有無の記入欄をまず設けている。そして、各項目ごとに、現状(構造と使用されている材料)について調査・記録する欄と修復箇所・劣化の状態(「補修箇所とその劣化」)を調査・記録する欄を設けている。

続いて、各項目の評価基準や補足事項について述べる。

まず、表紙に関する項目のうち、構造の欄にある「改装前の構造」については、構造に変化がない場合には「現状」と記入した。「スミス文庫」の場合は、原則として製本構造を変えていないため、ほとんどが「現状」となっている。表紙における「補修箇所とその劣化」欄では、次章で言及する通り、修復のパターンを4つに分類して記入するように設定した。また、旧表装の劣化状態は、旧表装の材料の経年劣化や破損は劣化に含めず、硬化・炭化の著しいもののみ劣化と評価した。表装に用いた修理材料のうち、革の補彩については、模様の色付けだけでなく、旧装との色の違和感をなくすための色付けも補彩ありと判断した。

見返しの修復の有無については、ノド部分以外で、欠損部分の繕いや裏打ちといった大きな修復や、一度見返しを剥がして貼りなおしたものを、「修復あり」とした。見返しの「補修材料による変色」については、表紙に修復が施されている場合

には、接着剤や修復の革の影響で変色している可能性も考えられるので、全て注意して確認し、変色の有無を記入した。

ノドの構造の欄にある「あり/なし」は、ノドを構造的に接続する機能を果たすノド布などの有無を記入するために設定した。

カルテ下部にある、備考欄左には、「スミス文庫」の各資料の製本構造について、今後の保存・修復を見越して、劣化状態や特徴等を記入した。右側には、服部の修復後に新たに劣化した部分や、修復時期は不明だが服部以外の修復痕、服部の修復時に変更されたと考えられる箇所とその具体的内容について記入した。

3) 調査結果と分析

① 「スミス文庫」のオリジナルの製本構造

「スミス文庫」は、16世紀から18世紀末に刊行された資料からなる。そのオリジナルの製本構造は、主として次のようなスタイルである。

表紙については、芯材(表紙ボード)の入った総タンニン革装で、綴じ付け製本構造で本文紙と接合されている。ただし、6タイトル(計11冊)については、リンプ装の装幀である。

背は、芯材も穴もない構造で背バンド綴じとなっている。材料について、綴じには糸が、支持体には麻ひもが用いられている。見返しは、綴じ見返しで、材料には洋紙が用いられている。なお、洋紙は無着色で、一部はマーブル加工されている。ノドには、ノド部分を構造的につなぐノド布等は見られない。本文紙(本体)は、折丁で綴じられており、ボロ布を原料とする無着色の手漉き紙(鎖線が観察できる)が用いられている。

② 修復のパターン

服部の修復で、本文紙(本体)の綴じ直しは1冊のみで、残りは表装の修復が中心となっており、次の4パターンに分類される。なお、図式化したものを本稿末尾に掲載する。

1 表装全体交換(旧表装貼り付け) 60冊

- 2 表装背部分交換（旧表装貼り付け）55 冊
- 3 表装部分修理（構造に関わる修復）157 冊
- 4 表装部分修理（簡易修復）221 冊

資料の実際の冊数（303 冊）と、各修復パターンに該当する資料数の合計が一致していないが、これは、資料の中に 1～4 の修復を重複して施した資料が存在することによる。

1 は、表装の革を一度剥がして、新しい表装革を貼り付けた上で、旧革を貼り付けている。この修復を「覚書」では「完全修理」と表現している。

2 は、表装の背部分の旧表装を剥がし、新しい革を入れ込んでから旧革を貼り付けて修復する方法である。

3 は、表紙側のノド部分で旧革の下に新しい革を入れ込んだ修復である。1 や 2 に比して軽傷のものへの修復ではあるが、表紙が本文紙（本体）と「なんとか繋がっている」状態のものに施される修復で、構造に関わる修理を、表装から部分的に修復したものを指す。

4 は、表紙の角の修復やノド部分の補強のためにテープ状の革を上から貼り付けるといった簡易な修復である。2 や 3 の修復を施された資料のほとんどは、この 4 の修復が加えられている。すなわち 4 は、補助的な修復の意味合いが強く、修復事業の最後の時期、時間と予算に余裕ができた段階で実施した作業と考えられる。

簡易修理に使用した革は、薄く漉いた革が用いられていた。修復事業が行われた時期は、戦後を脱してようやく高度成長期に入ったばかりの時代であり、需要の少ない製本用の革を特別に作っているところはほとんどない状態であった。そのため、製本用の革の入手は、輸入物であれ国産であれ、袋物屋、皮細工屋、手帳屋など革を用いる製品を販売する店に出回る前に、製本に適した革を入手したり、既成品では満足いかない場合には、製本用に漉き上げる場合があったようである¹⁶⁾。服部が用いた薄く漉いた革も、こうした経路で入

手したり独自に加工したものであったと推察される。

上記 1～4 の修復以外に、服部が表紙を新規作成して表紙を補う修復方法も見られる。この方法は、表紙の一部あるいは表と裏の両面が欠損している資料を対象としている。

「覚書」では、表紙の両面が欠損した資料は 2 冊とあるが、現状では表紙両面の新規作成は 1 冊のみ確認できた。

また片面が欠損している資料は、「覚書」では 2 冊とあるが、現状では 6 冊について表紙片面の新規作成が確認できた。劣化していた表紙が、修復の過程で使用できなくなったことで新規作成の必要が生じた可能性が考えられる。この 6 冊のうち、2 冊は別の書籍の表紙を流用して修復されている。流用した元の書籍については不明である。表紙を別資料から流用したのは、なるべく同時代の素材を用いようとしたためであろう。

その他、修復事業終了直前には、表紙の角の破損部分の補填、小口の修復、虫食い痕の修復、マーブル紙の補彩など、細部の修復も行っている¹⁷⁾。

③ 修復の特徴

本節では、「スミス文庫」に施された服部の修復の特徴について、各項目ごとに言及する。

【表紙】

・修復パターン 1 の表装全体交換（旧表装貼り付け）の資料を除いた多数の資料（221 冊）には、修復パターン 4 の表装部分修理（簡易）による補強がある。

・表紙角の簡易修復は、相当丸く仕上げている。これは、表紙ボードの角が破損していることによるが、破損部分に沿って丸く仕上げるのが服部の修復の傾向であるのか、あるいは「原型保持」の方針に従って、あえて角に補強をいれずに修復をしたかなど、複数の可能性が考えられる。

・上述のように、欠損している資料については、そのままにはせず、新しい表紙ボードと表装材で

新規作成している。これは、修復は必要最小限にとどめるという現在の考え方とは異なっている。当時は、欠損部には全て手を入れて復元することが一般的であったのか、もしくは東京大学からこのように指示されたのか。これについては、次節で「原型保持」との関係から再度言及する。

・オリジナルの装幀がリンプ装の資料については、改装せずにリンプ装を維持したまま修復が施されている。ただし、1タイトル（計6冊）については修復の痕跡を目視では確認できなかったため、現状では修復なしと判定している。一方で、オリジナルでは綴じ付け製本であったものがくみ製本に改装された資料が、確定できたもので2冊あった。こうした装幀の維持・変更については、次節で再度言及する。

・服部の修復前の写真（写真1）からは、応急処置的に白いテープ状の紙（布？）による補修がなされていることが確認できる。これについては、服部の修復時に全て除去されている。

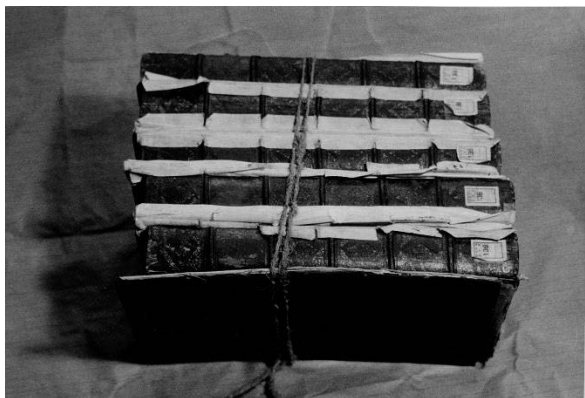


写真1 服部修復前の簡易修理の状態

また、年代は不明であるが、さらに古くに施された革を用いた部分的な修復について、服部は除去せずにそのままの状態を踏襲している。こうした過去の修復に対する態度も、当時の「原型保持」を考察するうえで、重要な手がかりとなる。次節で再度取り扱う。

・1タイトル（請求記号：アダムスミス:87:1-7の計7冊）について、表紙・効紙・遊び紙が、本来のものとは別のものに換えられているものがあ

ることが確認された。その根拠は、本文紙（本体）を基準として、用いられている紙の種類や紙質、そして、そこに残された表装の革貼りの痕や接着剤の痕などのシミが、現在表紙に接合されている表紙・効紙・遊び紙のそれと一致するかどうかにある。

これを表にまとめると表1のようになる。

表1

	表紙・表	効紙・表	遊び紙・表	遊び紙・裏	効紙・裏	表紙・裏
87-1	×	×	×	○	×	×
87-2	○	×	○	○	○	○?
87-3	○	×	○	×	×	新規
87-4	×	○?	○	新規*	新規*	×
87-5	×	×	○	○	×	×
87-6	?	?	×	○	○	○?
87-7	?	?	?	○	○	?

表の×は本文紙と一致しないもの、○は一致するものを指す。「新規」は、服部が新しい革を貼り直したものを指し、「新規*」は他とは明らかに異なった時代の新しい紙が使われていることを示す。?は、本文紙に残されたシミが不鮮明であったり、表装の革の形と革貼りの際のシミの痕が一致しないことから、判定を留保したものを指す。

例えば87-1や87-5の表紙および効紙には、同じタイトル内の別の巻のものが使われている可能性があり、タイトル内で表紙・効紙が入れ替わった状態で修復されてしまったと考えられる。しかし、「原型保持」の修復方針に従って作業にあたった服部が、わざわざ入れ替えて修復したとは考えにくい。

修復前の当該資料は、写真2にあるように表紙や背が本文紙から外れた状態、あるいは表紙が欠



写真2 修復前の状態（アダムスミス:87:1-7）

損している状態であった。

関東大震災や第二次世界大戦中の疎開による混乱によって、一部に表紙の入れ替わりがあって、服部の修復前にその状態で保管されてきたため、そのまま服部が修復した可能性が考えられる。

また、本文紙のノド部分下には、鉛筆書きで、○・□・▽など記号や「表 III」といった文字・数字が残されている（写真 3・4）。これは、外れてしまった表紙と本文紙とが、修復の際に誤って入れ替わらないために、服部が記した可能性が高い。

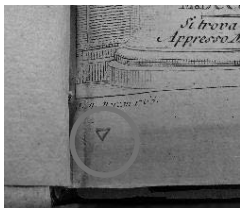


写真 3

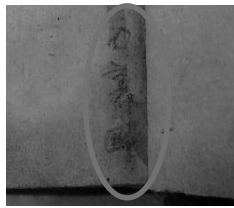


写真 4

以上のことを併せて考えると、表紙と本体の入れ替わりは服部の修復以前に既に生じており、服部は「原型保持」の方針に従い、そのままの状態修復したと考えることができる。

【背】

- ・元の製本の多くが背バンド綴じであることから、「覚書」にもある通り、背革の内側に和紙を貼って表紙ボードと接続して補強したものが多く、筒状のクータを入れて修復したものはほぼない。
- ・修復パターン 2 の表装背部分交換（旧表装貼り付け）が施された資料は、背幅が狭くなっているものがある。さらに接着剤が固化していることも加わって、ノドに負担がかかり、表紙がやや開き気味の状態となっている。

【綴じ】

- ・服部の修復では、1 冊（アダムスミス：71/53）を除いては、本文紙の綴じ直しは行われていないようである。「覚書」でも、「内容綴じ目の切れているもの」は 1 冊とあり、調査結果と符合する。ただし、綴じ糸や小口にみられる波打ちの現状から、服部の修復以前の古い段階で綴じ直したと考えられるものが数冊確認される。

- ・背に穴がない資料が多いことから、背穴から綴じの支持体の現状を目視確認できる資料は少ないが、「覚書」の記述を併せて考えると、服部は支持体の補強を多数行ったと思われる。

【見返し】

- ・見返しに修復がある場合、基本的にはオリジナルの紙を再利用している。また、欠損などにより表紙の新規作成の必要が生じた際には、反対側の表紙の見返し紙を転用したケースも見られ、できる限りオリジナルの材料で修復を試みる服部の努力が垣間見られる。

- ・見返しのノド部分の補修が多く見られるが、それは、表紙の修復時に見返しを剥がしたことで修復が必要となったことによるものが多いからと推察される。

- ・遊び紙の順序が本来あるべき順序とは異なるもの¹⁸⁾、別資料の見返しを利用して修復したものが散見された。こうした作業は、服部の判断によるものかは不明である。

【小口】

- ・小口が裁断された痕跡は、全ての資料において確認されず、オリジナルのまま保たれている。

【花布】

- ・花布を交換している資料は 200 冊ある。この場合、天地両方の交換と片方のみの交換を含む。特に、表紙の修復パターン 1 と 2 のように、表装の革を一度剥がしたものについては、元の花布を再利用せず、新しいものに交換したことが多い。

- ・花布の交換は、芯に糸を巻き付けて作った花布を本文紙の背に貼ったものがほとんどであるが、革製の花布も数冊確認された。ただし、布製のものは少ない。

- ・表装の修復に使用した革に補彩をした際には、新規の花布にも、本文紙に貼り付けた後に、革と同じ色を塗っている場合がほとんどである。この作業は、時間と予算に余裕ができた最終段階でまとめて行ったと推察される。

④服部の修復と「原型保持」

以上、表紙・背・綴じ・見返し・小口・花布の各項目ごとに、服部の修復における特徴を挙げてきたが、基本的な修復・製本の諸行程における技術は、現在の技術と大幅に異なることはないと考えられる。服部が明治期の洋式製本技術を知る最後の世代であることと併せて考えてみると、草創期の洋式製本の技術は、基本的な部分において、1950年代における諸師の製本・修復の技術、そして現在の製本・修復にまで継承されてきたのではないだろうか。

ただし一方で、表紙・背表紙の解体・復元作業の際に、表装の革をぬるま湯でふやかすといった、現在の保存・修復の考え方では適切とは言えない処置も施されている。現在残されているオリジナルの革に硬化や亀裂、剥落が生じているのは、この処置も一因となっている可能性がある。

また、簡易修復に用いられた薄く漉いた革や、背固めに使用した糊や接着剤（主に PVAC）についても、現状から考えると決して適切ではなかったと考えられる。

以上のことから、1950年代当時は、保存の観点からの製本や修復については、考え方や技術、使用する材料に関する選定基準などが、まだ確立されていなかったと思われる。

修復資料のオリジナルの製本構造は、上述の通り大半が綴じ付け製本で一部がリンプ装である。リンプ装について、表装の交換を行っているケースはあるが、服部はリンプ装の装幀を維持するよう修復している。この点では、服部が「原型保持」に従って、製本構造の改変は行わずにオリジナルの装幀を維持したといえる。しかし、綴じ付け製本の中にはくるみ製本への改装がみられ、オリジナルの製本構造を変更しているケースも見られる。これは、「原型保持」の方針と矛盾している。資料の劣化状況などから判断して改変した可能性もあるが、この点については「覚書」に言及が

ない。これらが本当に必要な改変であったのか否か、またくるみ製本に変更した理由は不明である。

表紙の修復の中で、修復当時すでに欠損している場合には、新規の表紙を補ってオリジナルに近いものに復元・修復している。これは、現在の「原形保存」とは異なるものである。また、先に紹介したように、一橋大学附属図書館が「どうにも補修の利かない物は、当時の状態の製本に模して作り上げる」という修復方針を、服部の修復と同時期に掲げていたことを考えると、「スミス文庫」の修復においても同様の方法が採られていたと推察される。また、「覚書」には、修復事業開始当初、利用頻度などを考慮して優先して修復する「重点主義」を採ったという記録があり¹⁹⁾、「原型保持」の方針を取りつつ、一方で利用を見越した修復が服部に求められていたのだろう。

表紙を新規作成した資料の中には、修復前の写真から、修復前にはオリジナルの表紙が存在していたはずだが、修復時に新規作成されて、オリジナルが現存していない資料もある（アダムスミス:64:3）。これは、現在の「原形保存」の考え方にも、当時の「現存する元の材料を一かけらも粗略に扱わない」とする「原型保持」の方針にも明らかに矛盾している。おそらく、修復の際になんらかの事情でオリジナルの表紙が再利用できないほどに破損してしまったことで、やむなく新規作成したことによると思われるが、旧装も保存する現在の資料保存の考え方は、当時は根付いていなかったのだろう。

では、服部が理解した「原型」とは一体何をさすのだろうか。それは、服部の修復前にほどこされた修復痕に対する服部の処置の仕方から見出すことができる。服部は、自身の修復前の応急処置的修復については除去したが、それ以前の修復については残した状態で修復している。このことから、服部は、「スミス文庫」の「原型」（オリジナル）については、1920年に新渡戸稲造から寄贈

されて東京大学経済学部に入った当時の状態と認識していたと考えられる。

4 おわりに

本稿の最後に、1950年代当時の「原型保持」とは一体どのようなものであったのかを、服部による「スミス文庫」の修復の実態から考察してみたい。当時の「原型保持」とは、現存するオリジナルの材料は残すことを前提としながら、オリジナルにできるかぎり近づけて復元することであったと言えるだろう。

また当時は、保存の観点を踏まえた考え方や技術が十分に確立されておらず、修復の材料や工程の一部に問題があり、現在の劣化の要因になっている場合もあることは否めない。しかし、年月を経るごとに、資料保存に関連する研究や技術が発展する中で、それまでの修復の問題点を一つずつ

克服していくことで、現在の「原形保存」の考え方の確立に至ったと考える。その意味で、「原型保持」の方針のもと実施された「スミス文庫」の修復事業は、図書館界での修復において先駆的であり、現在の「原形保存」へと導いた日本の図書館界や日本の洋式製本の技術における記念碑的な位置を占めるといっても過言ではないだろう。

【謝辞】現物調査および調査データ作成について、修復の専門家である篠田飛鳥氏に多大な協力を得た。ここに改めて感謝の意を表したい。

【附記】本稿は、JSPS 科研費 16K12543 による研究成果の一部である。

(もりわき ゆき：東京大学大学院経済学研究科
特任助教)

- 1) 高野彰『帝国大学図書館成立の研究』ゆまに書房、2006年。
- 2) 「覚書」の全文は、森脇優紀・福田名津子校注、小島浩之解題『1950年代のアダム・スミス文庫に関する覚書』校注『東京大学経済学部資料室年報』第9号、2019年3月、15-38頁に掲載している。(以下、「1950年代覚書」と略記)
- 3) 『国立大学図書館改善要綱及びその解説』文部省大学学術局、1953年。
- 4) 『一橋大学附属図書館史』一橋大学、1975年、70頁。
- 5) 「1950年代覚書」22頁。
- 6) 東京都製本工業組合が運営するwebサイト「製本のひきだし」の「製本用語集」での定義。<http://sei-hon.jp/glossary/words/%8f%94%8e.html> (accessed:2020/03/09)
- 7) 『書物語辞典』古典社、1939年、25頁、138頁。
- 8) 「1950年代覚書」21頁。
- 9) 「1950年代覚書」22、25頁。
- 10) 『一橋大学附属図書館史』70-71頁。
- 11) 安江明夫「現代に生きる図書修復の思想：「IFLA 原則(1979)」を巡る考察」『文化財保存修復学会誌』第53巻、2008年、54-66頁。
- 12) チェーザレ・ブランディの修復・保存の考え方がまとめられた著書として、*Teoria del Restauro* が世界的に知られ、各国語に翻訳されている。日本語版は、小佐野重利監訳、池上英洋・大竹秀実訳『修復の理論』三元社、2005年。その他、ブランディの理論については、田口かおり『保存修復の技法と思想：古代美術・ルネサンス絵画から現代アートまで』平凡社、2015年を参照のこと。
- 13) 日本イコモス国内委員会『文化遺産保護憲章 研究・検討報告書』1999年、68頁。
- 14) ラノリンとは、毛に覆われた羊の皮脂腺から出る分泌物を精製したもので、保革油の一成分として用いられる。Wool wax ともいわれる。ラノリンには脆くなった革の中に浸み込んで、柔軟性を向上させる効果がある。
- 15) 「1950年代覚書」23-24頁。
- 16) 『一橋大学附属図書館史』71頁。
- 17) 「1950年代覚書」28頁。
- 18) 効き紙に貼られている蔵書票の転写痕が1枚目ではなく、2枚目の遊び紙についていたことから判断できる。
- 19) 「1950年代覚書」27頁。

洋書修理痕調査カルテと評価基準

別紙説明図あり

- ①表装全体交換(旧表装貼り付け)
- ②表装背部分交換(旧表装貼り付け)
- ③表装部分修理(構造)
- ④表装部分修理(簡易)

旧表装の硬化・炭化が著しいもの(材料の経年劣化や破損は含まず)

修復前の製本構造がわかるものについては記入する。東大資料は基本的に製本構造を変えていないのでほとんどが「現状」となる

	現状		補修箇所とその劣化
	構造	材料	
表紙	とじつけ 補修 くるみ あり/なし わかんない わからない 改装前の構造() 芯材 あり/なし	総 / 半 / 半角 タンニン革 / ペラム / トーイング 布 単色紙 / マーブル紙 / その他の装飾紙 その他()	表装全体交換 表装全体交換(旧表装貼り付け) 表装背部分交換(旧背表紙貼り付け) 表装部分修理(構造 / 簡易) 背 / のど / 表紙 / 角 修理材料: 革(補彩: あり/なし) 紙(補彩: あり/なし) 表紙反り あり/なし
背	補修 穴あり/穴無し あり/なし わからない 芯材あり/芯材なし		クータ使用 あり/なし/わからない
とじ	中とじ 平とじ 補修 背バンドとじ 打ち抜きとじ あり/なし わかんない テープとじ ミシンとじ 支持体なし ステープラー ステープラー その他() 仮とじ わかんない その他() わかんない	麻ひも / 革ひも 支持体 布テープ / 皮テープ / 革テープ その他() わかんない 糸 / ステープラー とじ糸 その他() わかんない	支持体交換 あり/なし/わからない 綴じなおし すべて / 部分
見返し	とじ 補修 貼り あり/なし 巻き わかんない 複合型 わかんない	洋紙 無着色 / 着色 マーブル / その他の装飾紙 和紙	オリジナル使用 すべて交換 部分的に交換 おもて: 効き紙 / 遊び紙 うら: 効き紙 / 遊び紙
のど	とじ 補修 あり/なし あり/なし わかんない	布 / 紙 / その他()	補修材料による変色 あり/なし 表紙補修「あり」の資料はすべてつける
中身	折丁 / ペラ	原料: ボロ / パルプ / わかんない 性状: すの目あり/なし : 無着色 / 着色	

模様だけでなく、元表紙との違和感をなくすための色付けも「あり」と評価

「あり」にしたもの・ノド以外の大きな修理(欠損部繕い・裏打ち)・一度剥がして戻したものの(端だけの場合は「なし」)

ノドを構造的につなぐ「ノド布」などの有無

特記事項		
小口	オリジナル / 補修後着色 / わかんない	色: 金 / マーブル / ベタ / バラ / なし / わかんない
花布	オリジナル / 交換 / なし	交換後の色: 黄赤 / 青白 / その他()
留めひも	オリジナル / 交換 / なし	
備考		

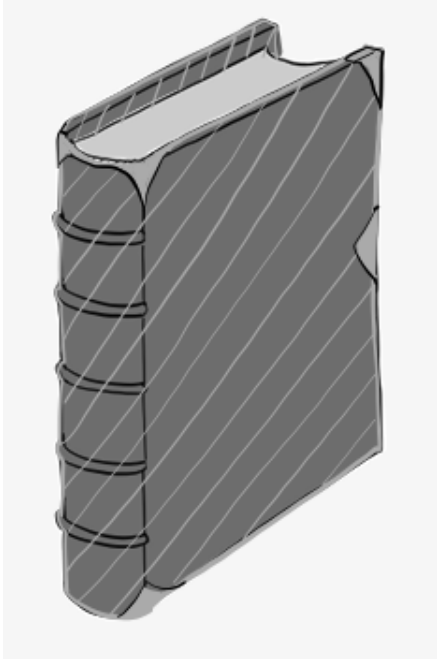
オリジナルの製本に関する劣化や特徴など

- 服部修理後の再劣化部分
- 修復時期は不明だがオリジナルではないと思われる修理について
- 服部修復時に変更されたと思われる箇所やその具体的な内容

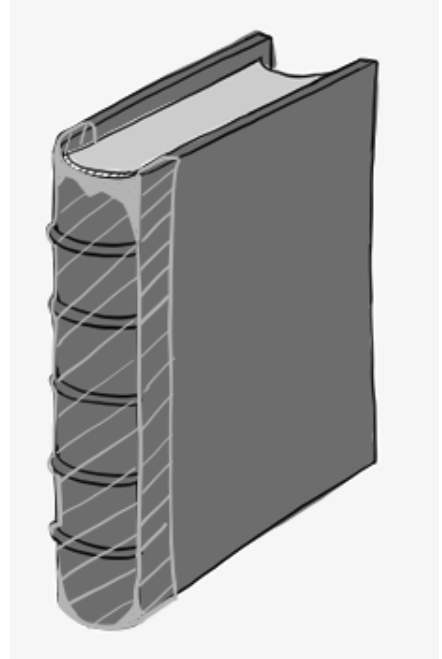
表紙修復の4パターンの図

ベタ＝修理革が見えている部分（表装の上から修理・元表装欠損部分）

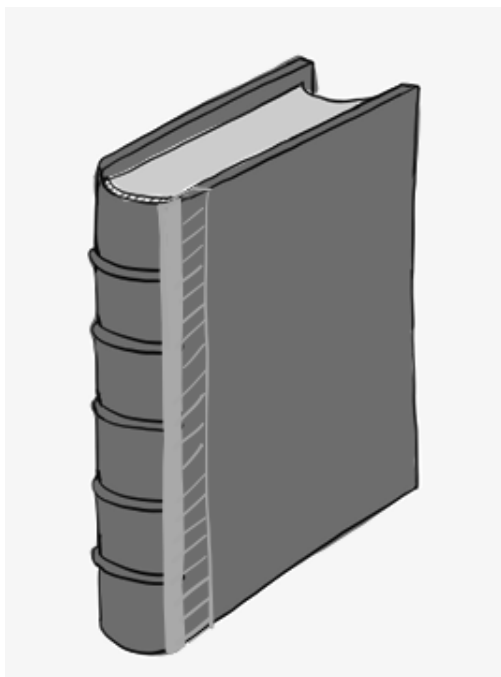
斜線＝旧表装の下に修理革がある部分（旧表装をはがして修理革入れこみ）



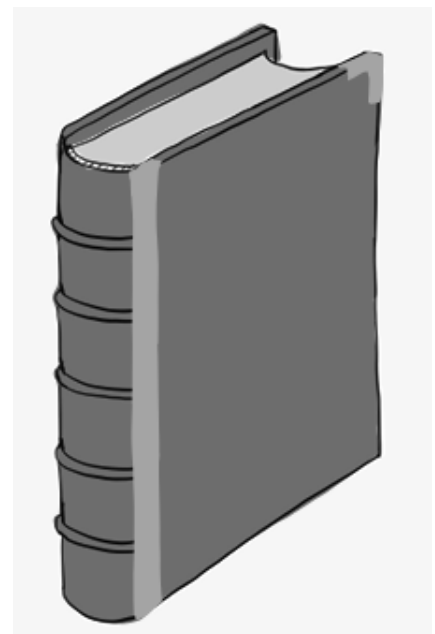
①表装全体交換（旧表装貼り付け）



②表装背部分交換（旧表装貼り付け）



③表装部分修理（構造）



④表装部分修理（簡易）